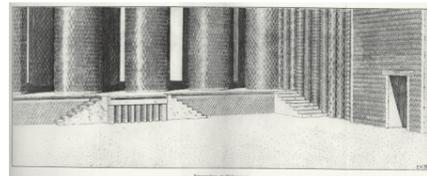


壮大な装飾タイル空間は、すべて人間がつくり上げたもの。その魂は今も心を打ちます。その感動の世界をINAX世界のタイル博物館では「装飾する魂」として常設展示中です。このコーナーでは文化度100%の展示室から、極上の雰囲気をもつ6回シリーズでレポートします。第1弾はメソポタミアのクレイペグ装飾。5,500年前のタイル釘で描かれた世界を再現しました。世界のタイル史を学びつつ、タイル美に酔いしれるひとときをお楽しみください。

タイルの原型・クレイペグ

竹多 格 ITARU TAKEDA
(INAX世界のタイル博物館 主任学芸員)



エアンナ神殿のクレイペグ装飾壁の復元図
出典：A.Noldekeほか ウルク発掘調査概報第4集
(プロイセン科学学会研究報告集No.6 1932) 図版8



上—再現されたクレイペグ装飾の半円柱群
下—クレイペグを積み上げた表層の断面

タイルの原型といわれるクレイペグ（粘土釘）は、メソポタミアの初期の文明を担ったシュメール人の都市国家ウルクで出土しました。このウルクに、紀元前3500年頃に創建されたエアンナ神殿と呼ばれる広大な神殿の遺構があります。そこには直径2.6mもの独立した柱が4本ずつ2列に並んだ列柱広間があり、その柱に無数のクレイペグによる菱形やジグザグ模様が描き出されていました。

当時の建物の多くは日干しレンガでつくられており、泥あるいは漆喰を厚く塗って仕上げられていたため、目地も見えず単調になりがちでした。そこで考えられたのが、クレイペグによる壁面装飾です。頭部を着色したクレイペグを、上塗りの土壁に部分的に差し込んで装飾を試みた時代もあったと考えられますが、最終的には全面にわたるモザイク模様を実現したのです。施工には、剥離や脱落のない確実な方法が考案され、クレイペグを“積み上げる方式”が確立されたと考えられます。絨毯を織る場合に色糸を選ぶのと同じように、クレイペグを地面から水平に1段ずつ模様を意識しながら色を選んで並べます。次に接着剤として泥を薄くかぶせて、その上に2段目を積みみます。このようにして、数メートルにも及ぶ円柱や壁の表面に、クレイペグをびっしり張り込んだモザイク装飾が積み上げられていくのです。クレイペグは、液晶画面のドットのように規則性を持った配置による点描素材として使われていますが、ここでは動物や花などの具体的な図像を描くのではなく、基本的には菱形やジグザグなどの繰り返し模様が描かれています。これらの模様は、この遺構のような装飾する部分の面積が広く、大勢で一斉に作業する場合には、特に作業性の良い図柄であったと考えられます。中には図柄を描くのにどうしても必要な1点がイレギュラーに押し込まれた配置も見られますが、それも繰り返し模様になっています。なお、円錐という形状は、水平に並べると扇形になるので、円柱などの曲面にも追従でき、並んだクレイペグの間には適度な隙間が出来て、接着代が確保できます。また、大きさは手のひらサイズで成形しやすく、非常に合理的な形状と大きさであったことが分かります。

クレイペグで描かれている模様は、直線基調のシンプルなもの、ジグザグ模様は大河に押し寄せる大波を自在に操りたいという願いから、整然と流れるチグリス・ユーフラテスの両大河の様子を表し、重ね菱形は、長い年月の間にも朽ちていくことのない強固な大地を築きたいという願いから、段丘状の大地群や整然とした都市を表しているのではないかと考えられます。そこには洪水や飢饉、外敵の侵入などに脅かされて生活する人々が神殿を建て、神に祈るという切実な思いが感じられるとともに、皆で装飾する作業を楽しむ労働の様子が目に浮かびます。

ただた・いたる——INAX世界のタイル博物館 主任学芸員 / 1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶（現・INAX）入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。



やきものによる世界最古の建物装飾 クレイペグ・モザイク